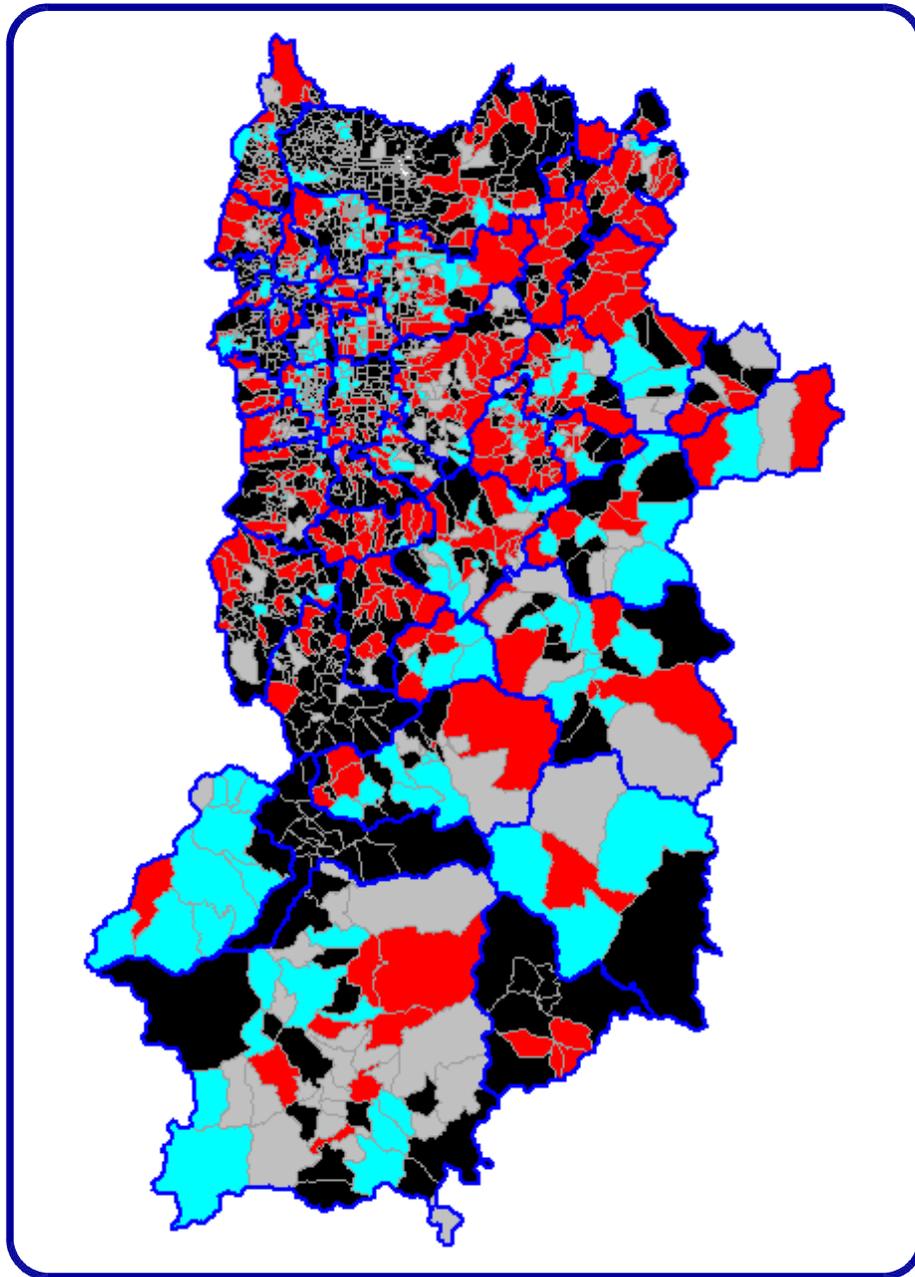


農業・林業集落アンケート調査によるアライグマの生息状況・被害状況(平成22年度)

1. 平成22年度の農業集落アンケート調査によるアライグマの分布



左図は、平成22年度の農林業集落アンケート調査による、アライグマの分布である。

農業集落でアライグマが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

県内の広い範囲から「いる」との回答があり、県北部から県中部を中心に、既に県内の広い範囲で生息していることがわかる。

平成22年度

■ いる	416集落
■ いない	209集落
■ 回答無し	123集落
■ 回収無し	1060集落
全	1808集落

参考)平成21年度

■ いる	417集落
■ いない	367集落
■ 無回答	3集落
■ 回収無	1021集落
全	1808集落

参考)平成20年度

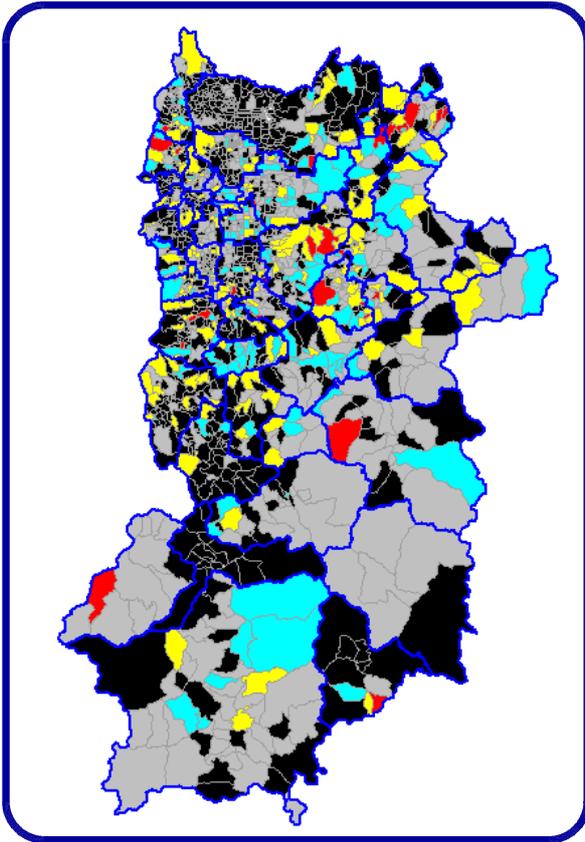
■ いる	322集落
■ いない	318集落
■ 回答無し	117集落
■ 回収無し	1051集落
全	1808集落

参考)平成19年度

■ いる	355集落
■ いない	596集落
■ 回答無し	100集落
■ 回収無し	757集落
全	1808集落

凡例 図中 青線 旧市町村界
市町村界内側の線 大字・地区界
 市町村界、大字・地区界の凡例は以降の図も同様である

2. アライグマの農地・集落周辺への出没状況



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、アライグマの農地・集落周辺への出没状況である。

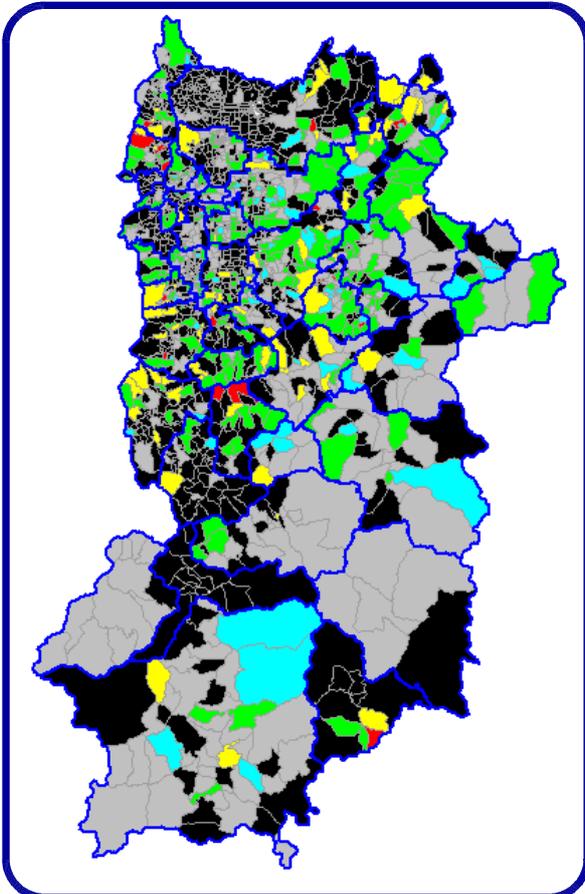
アライグマが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった集落の内訳は下記の通りである。

「よく見る」との回答は県北部や県中部からが多い。

平成22年度	
よく見る	30集落(8.0%)
たまに見る	188集落(50.1%)
あまり見ない	157集落(41.9%)
計	375集落

参考)平成21年度	
よく見る	39集落(10.3%)
たまに見る	206集落(54.4%)
あまり見ない	134集落(35.4%)
計	379集落

2. アライグマによる農業被害の大きさ



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

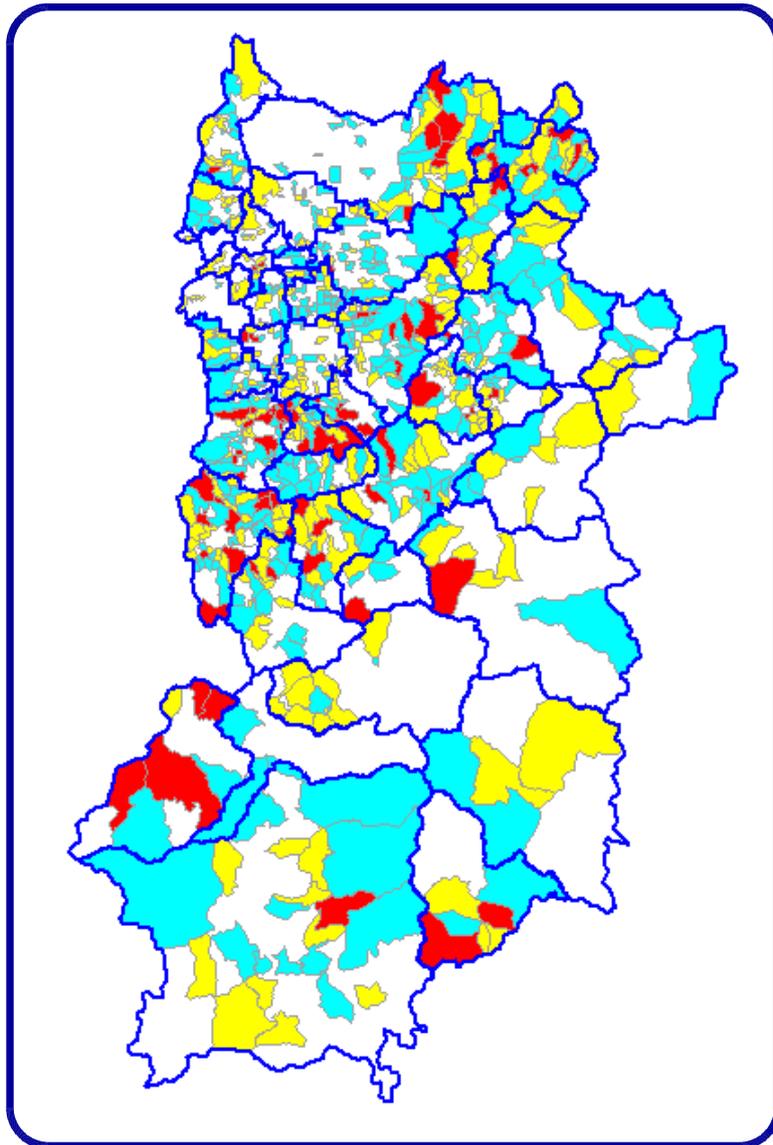
アライグマの被害は、県北部から県中部を中心に発生している。

被害の大きさは、「軽微」という回答が約63%と最も多かった。しかし、「大きい」または「深刻」という回答も併せて約23%存在している。そしてこれらの地域は、農地・集落周辺への出没が多い地域と重なっている。

平成22年度	
ほとんど無い	64集落(15.7%)
軽微	251集落(61.7%)
大きい(生産量の30%未満)	72集落(17.7%)
深刻(生産量の30%以上)	20集落(4.9%)
計	407集落

参考)平成21年度	
ほとんど無い	67集落(16.6%)
軽微	230集落(56.9%)
大きい(生産量の30%未満)	81集落(20.0%)
深刻(生産量の30%以上)	26集落(6.4%)
計	404集落

3. アライグマの農地・集落周辺への出沒動向(平成19~22年度の4年間)



左図はアライグマの農地・集落周辺への出沒の4年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのアライグマの出沒を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ているが、これらの回答を「よく見る」は+1、「たまに見る」は±0、「あまり見ない」は-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落に色をつけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。なお、空白は調査した4年間、アライグマがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

アライグマの農地・集落周辺への出沒は、県北東部から県中部、県西部、そして県南部の一部地域でにかけて多くなっていた。これらの地域は、被害が「大きい」または「深刻」と回答のあった地域と重なっている。

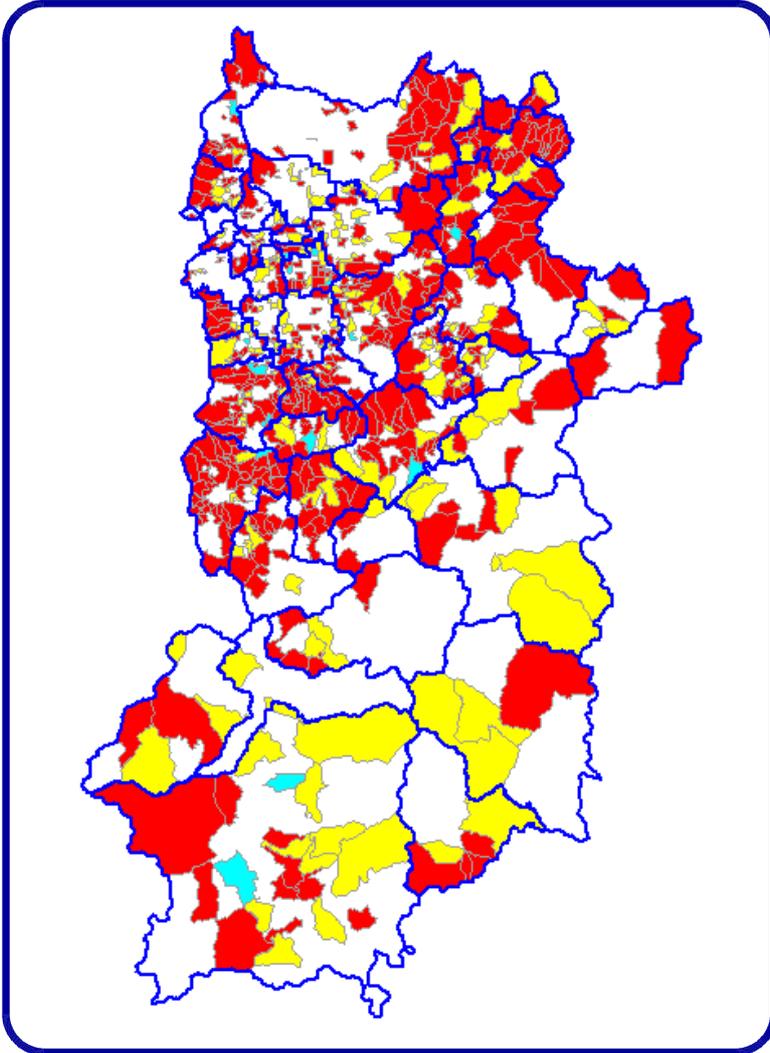
・平成22年度までの4年間

よく見る	80集落(11.3%)
たまに見る	279集落(39.4%)
あまり見ない	349集落(49.3%)
回答数	708集落

・参考)平成21年度までの3年間

よく見る	66集落(9.4%)
たまに見る	457集落(64.8%)
あまり見ない	182集落(25.8%)
回答数	705集落

4. アライグマの農業被害意識の動向(平成19~22年度の4年間)



左図はアライグマによる農業被害の意識の4年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度(初年度調査時のみ10年前と比較して)より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ているが、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0の場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減っている場合)は青色で各集落に色をつけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。空白は調査した4年間、アライグマがない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

アライグマによる農業被害の意識は、ごく一部では減っているものの、回答を得た集落のうち約70%が増えたとなっており、農業被害は県全体で増加傾向にあることが判る。

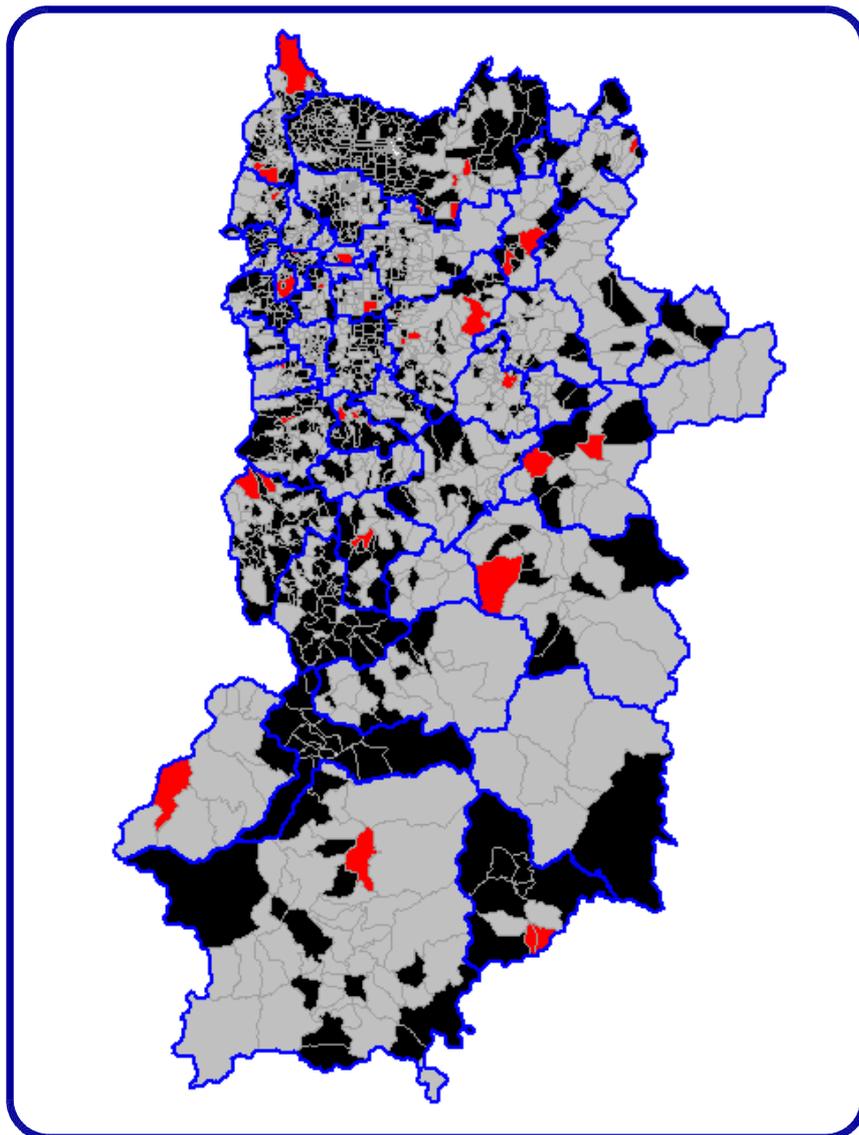
・平成22年度までの4年間

■ 増えた	488集落 (69.6%)
■ 変わらない	196集落 (28.0%)
■ 減った	17集落 (2.4%)
回答数	701集落

・参考)平成21年度までの3年間

■ 増えた	421集落 (70.3%)
■ 変わらない	165集落 (27.5%)
■ 減った	13集落 (2.2%)
回答数	599集落

5. アライグマによる衛生被害



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、アライグマによる衛生被害の意識調査の結果である。

「家屋に住み着く、糞尿被害がある」を衛生被害とした。

回答数は多くないが、県内の広い地域から回答がある。

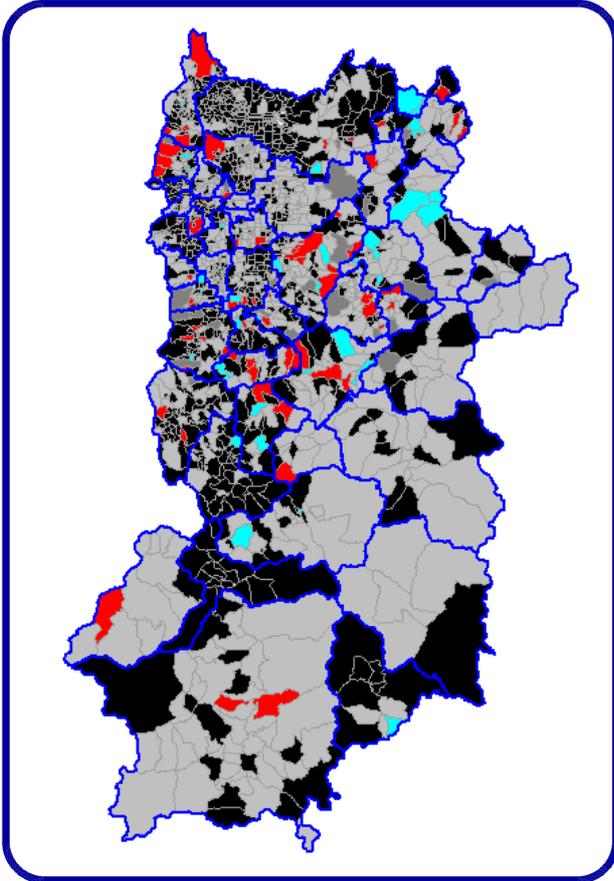
・平成22年度

■衛生被害がある 38集落

・参考)平成21年度

■衛生被害がある 32集落

4. アライグマの被害対策 侵入防止柵(防護柵)の設置の効果(農地)

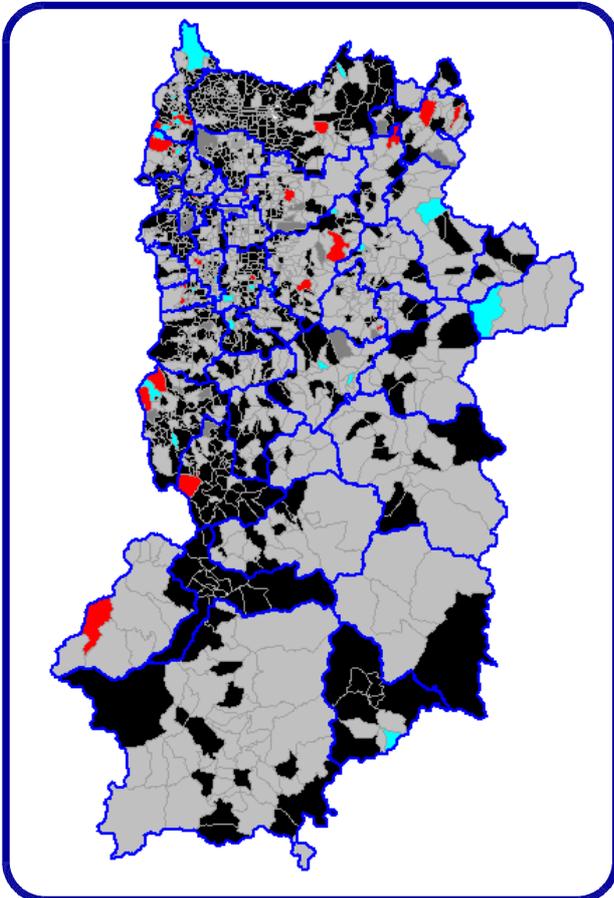


左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、アライグマ侵入防止柵(防護柵)の設置の効果の意識調査の結果である。

効果の有無の回答のうち約65%が、侵入防止柵(防護柵)による被害対策は効果があったということであった。

■ 効果があった	69集落 (65.1%)
■ 効果がなかった	37集落 (34.9%)
回答	106集落

5. アライグマの被害対策 有害捕獲の効果(農地)



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

効果の有無の回答のうち半数弱が、有害捕獲による被害対策は効果があったということであった。

■ 効果があった	23集落 (47.9%)
■ 効果がなかった	25集落 (52.1%)
回答数	48集落

アライグマの生息数が少ない侵入初期には、被害も少ないため対応が後手になりがちである。そして、被害が顕在化してから捕獲を実施することが多いが、その時点で既にアライグマは個体数を増加させている。アライグマの産仔数は年に約3~7頭と多産なため、例えば10頭生息しているとすると9頭までを捕獲しなければ個体数を低減させることはできない。効果がないように感じられるのは、捕獲数が少ない可能性がある。

アライグマはそもそも北米の動物であり、日本の自然界に存在するものではないため、「外来生物法」で、「特定外来生物」に指定されている。外来生物法の「防除計画による捕獲」、鳥獣法の「有害捕獲」によって、積極的に捕獲を実施し、アライグマを地域から排除しなければならない。